

## シンポジウム 哲学研究の比較

### 「分析哲学者の典型的なふるまいはどこから来るのか」

秋葉剛史（千葉大学）

本提題では、主に分析哲学の領域で研究を行っている者の観点から、自分たちの日ごろの活動を紹介した。もっとも、提題者は決して「分析哲学」と総称される領域のすべての動向に通じているわけではないので、ここでの話はあくまで、分析哲学という巨大な営みの一部に携わる者の目から見た限定的かつ暫定的な分析哲学像である。

提題の前半部では、分析哲学における研究活動の実態、研究の評価基準、教育実践、という三つの点について、この分野の共通了解と言ってよいと思われることを説明した。まず研究活動の実態に関しては、ひとくちに分析哲学と言っても今ではその研究トピックはきわめて多岐にわたっていること（言語や論理、科学、フィクション、倫理などなど）、それぞれのトピックに関する研究はかなりの程度細分化が進み「ノーマル・サイエンス」化していること、などを紹介した。また研究の評価基準に関しては、明晰さや論理性といった基準が（ふつう分析哲学に対してもたれている印象どおり）重視されていること、研究共同体に対する自分の研究の貢献を明確にすることが要求されていること、などを指摘した。さらに教育実践に関しては、ディシプリン重視の分析哲学的な教育法には良い面も多くあるけれど、専門化・細分化の進みすぎ（いわゆるタコツボ化）や、明晰さの要求による自発的な問題意識の抑圧といった懸念もあることを述べた。

続いて提題の後半部では、以上のような分析哲学の営みに関して、特にそれを他の哲学的伝統と比較した場合に際立ってくるいくつかの特徴をとり上げ、それらに対して一定の説明を与えることを試みた。分析哲学に固有な特徴としてここで挙げたのは、論理学や言語学と区別がつかないようなテクニカルな仕事が存在すること、どのトピックにおいても「～説」や「～主義」と名の付く理論的派閥が数多く形成されていること、自然科学との整合性がしばしば気かけられること、などである。そしてこれらの特徴を説明する要因としては、次の二つの点を挙げた。すなわち一つは、分析哲学の伝統においては「理論化を通じた世界把握」という方法が広く共有されていることであり、もう一つは、分析哲学の内部には言語・論理そのものを研究対象とし、他の哲学的問題の解決にも役立つ分析の道具（物理学にとっての数学に類比的なもの）を開発する「職人」的な哲学者が多く存在していること、である。

さらに提題の最後には、いま挙げた二つの要因（理論化の方法、職人の存在）のどちらに関しても、フレーゲやラッセルといった分析哲学創成期の哲学者たちの影響はかなり大きいのではないかという見立てを述べた。